

織田コレクションが見られる2つのギャラリー

ASAHIKAWA

チエアーズギャラリー



HIGASHIKAWA

東川町文化芸術交流センター



明治時代の赤レンガ倉庫群をリノベーションした、歴史が薫る文化施設「蔵囲夢(くらいむ)」。その一棟のチエアーズギャラリーでは、織田コレクションの常設展示が旭川デザイン協議会によって行われています。旭川駅から東へ徒歩8分、地ビールレストランや文化活動に利用できるフリースペースも設けられています。

開館時間:10:00~18:00 (5~10月)  
11:00~17:00 (11~4月)  
休館日:年末年始、月曜日、展示入れ替え期間  
入場料:無料

チエアーズギャラリー  
070-0030 北海道旭川市宮下通11丁目 蔵囲夢内  
TEL:0166-23-3000 FAX:0166-23-3005

CHAIR?  
GALLERY

旧東川小学校を改修して2016年秋にオープンした複合施設。東川に縁のある作品を展示するふたつのギャラリーでは、織田コレクションの中からテーマごとに織田氏がセレクトした椅子や日用品の名作が常設展示されています。大雪山系に関する書籍を集めた図書コーナーやカフェも併設。町民や学生たちがいつも集っています。

開館時間:10:00~18:00  
休館日:年末年始、月曜日、展示入れ替え期間  
入場料:無料

東川町文化芸術交流センター  
070-0030 北海道上川郡東川町北町1丁目1番1号  
TEL:0166-74-6801 FAX:0166-82-4141

織田コレクション協力会

079-8412 北海道旭川市永山2条10丁目1-35 旭川家具有業協同組合内 TEL:0166-48-4135 FAX:0166-48-4749

東川町

071-1492 北海道上川郡東川町東町1丁目16番1号 TEL:0166-82-2111 FAX:0166-82-3644

odacollection.jp

# ODA COLLECTION

## 織田コレクション

20世紀の美しい椅子と日用品の名品たち





#### 織田コレクションとは

椅子研究家の織田憲嗣氏が長年かけて収集、研究してきた、20世紀のすぐれたデザインの家具と日用品群を指します。その種類は北欧を中心とした椅子やテーブルから照明、食器やカトラリー、木製のおもちゃまで多岐にわたり、さらに写真や図面、文献などの資料を含め系統立てて集積されており、近代デザイン史の変遷を俯瞰できる学術的にも極めて貴重な資料です。その稀少性と研究実績が世界的にも高く評価され、各国から展覧会への協力要請が相次いでいます。

ご存知でしょうか。

北海道旭川市、東川町、東神楽町にまたがる、

大雪山を望む家具産地に、

世界に類を見ないユニークな

椅子と日用品のコレクションがあることを。

椅子研究家の織田憲嗣氏が持つ「織田コレクション」。

世界の貴重な名作椅子約1350種類をはじめ、テーブルや照明、

テーブルウェアなど約8千点を所蔵します。

「世界の若者のために、美しいデザインを残さなければ」。

織田氏の思いと、

その人生をかけた収集と研究に共感する人々が今、

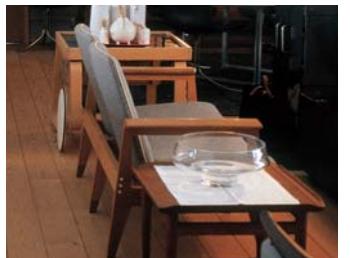
日本初のデザインミュージアム建設に向けて、

動き出しています。

織田コレクションには、世界的に稀少な椅子が多くあります。たとえば北欧デザインの巨匠フィン・ユールがデザインした「チーフティンチェア」の、現在伐採が規制されているブラジリアンローズウッドモデル。名工房ニールス・ヴォッダーで製造された78脚のうち、この材を使ったものはわずか5脚です。同じくフィン・ユールが試作で1脚だけつくった2人掛けのソファも織田氏が所有します。アームと脚などをつなぐネジの跡を牛骨細工で埋めた手の込んだもので、コストが高すぎて生産に至らなかったため、この試作が世界に1脚のソファになりました。

## 世界でたった一脚、つくられた名作が、 ここにある。

織田コレクションの最大の特徴は、素材、労働、流通すべてにおいて健全に製造された本物だけが、織田憲嗣氏ひとりの価値観と審美眼で集められていることです。地域や時代、国が異なっても統一感があるのはそのためです。かと言って、有名デザイナーのものばかりでない点も、「世界に類を見ないユニークなコレクション」と評されるゆえんでしょう。アフリカの木を削り出した腰掛けなどにも、プリミティブなものだけが持つ「無意識の美」があると織田氏は話します。また、椅子が完成品だけでないことも大きな特徴です。同じ椅子でも、最初の試作品、製作した工房が異なるもの、時代を経てリデザインされたものが比較して見られるのが、いわゆるコレクターとは違うところ。「Yチェア」で知られるデンマーク家具の巨匠ハンス・J・ウェグナーの最高傑作「ザ・チェア」では、世界に2脚しかないプロトタイプ(試作)のうちの1脚、1949年に初めて製品化された背に籐が巻かれたモデル、そしてその背をフィンガージョイントにしてヨハネス・ハンセン社が製作した革張り座と籐張り座の2タイプ、計4脚を所蔵します。「完成品と同じくらい、完成に近付いていくデザインの変遷、プロセスが重要なことです」(織田氏)。



chieftains chair



ひとりの研究者が、  
1,350脚を持つことの意味。

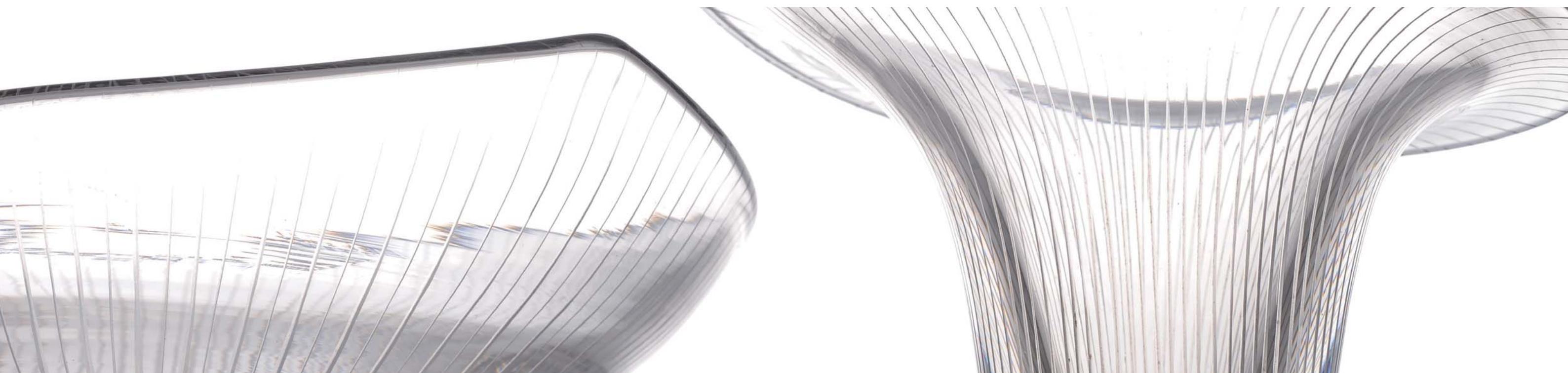


最初は好きな椅子を集めていた織田氏が、趣味を「研究」にシフトしたのは、椅子の数が100脚を超えた頃だといいます。取材のため家具の販売代理店へ問い合わせたのをきっかけに、まとまった数の名作椅子を手に入れたことから、現物を系統立てて収集し研究していくことを決意します。収集にも加速がつき、現在所蔵するのは複数あるものを1種類として約1350種類。テーブルやデスク75点、キャビネット50本などと合わせ、家具だけでも世界のデザインミュージアムと肩を並べるボリュームと資料価値を持つまでになっています。これだけの量が「1カ所に存在していること」が織田コレクションの価値です。「核」となるアイテム群とそれを補完する「準核」群、さらにそれを支える肉付け群としてまとまっていることで、書籍を出版する場合や展覧会を開く場合でも、切り口は無限に広がります。旭川市の織田コレクション常設展示場「チエアーズギャラリー」でも、スチール素材の椅子、プラスチックの椅子、ユニークなデザインの椅子と、25年以上も多彩な展示を続けてきました。このように、ほかの施設から借りることなくいつでも地域に教育資料として生かすことができるこのコレクションを、散逸せずに守っていかなければなりません。



2002年北海道東海大学旭川校舎体育館で開催された「1000CHAIRS展」。





日々使うために  
デザインされたものの美しさ。



織田コレクションのもうひとつの柱が、「美しい日用品」です。私たちが日々使う道具には、デザイナーたちが創意工夫した秀作がたくさんあります。織田コレクションには特に1950～60年、織田氏が「デザインの力と技術が見事に結晶した黄金時代」と表現するミッドセンチュリーの北欧のものを中心に、陶磁器やガラス器、カトラリーなどのテーブルウェアやキッチンツールの名作が揃っています。織田氏の「名作の定義」のひとつに、「25年以上商品化され続けていること」があります。「買う人がいるから売れる、売れるからつくる。長寿商品は人々に選ばれた結果なのです」。

長い間にはメーカーのオーナーが交代したり工房が変わることで、微妙にものづくりが変化します。しかしそれもまた名作の歩みであることから、織田コレクションでは同じ製品を複数購入。たとえば、フィンランドを代表するデザイナーのカイ・フランクによる「カルティオ」。これは1950年代は手吹きの繊細な仕上げでしたが、現在は食洗機に入れても壊れないよう厚手のものが大量生産されています。衣食住すべてがファスト化する現代、民度とは何かとの問いに織田氏は、「美しい日用品は民度の高い国民を生み、民度の高い国民は美しい日用品を生み出します。少し不便でもいねいに暮らすよろこびを取り戻しましょう。いいものは、私たちの振る舞いを決定付けます。つまり、ものは生き方を決定付けるのです」。



照明やオーディオなどの家電製品、玩具や文具、テキスタイル、アートオブジェ、そして世界のバードハウス。織田コレクションの日用品は、生活のさまざまな場面にわたってトータルに集められています。そのため、展覧会などでは「もの」だけではなく「暮らしのシーン」を空間で表現することが可能なのです。たとえば照明。日本人が得意としてきた暗さの演出を見直し、光との暮らしを楽しむ感性を取り戻したいとの思いから、北欧とイタリアを中心名品を揃えています。イタリアは光源を自由に移動できたりデザインに遊びを取り入れるのが世界一上手な国。一方北欧は、光源がどこからも見えず眩しさがない、いわば人が中心のデザイン。どちらも「必要なところに必要な明るさ」という点で共通しています。子どもを「人格を持ったひとりの小さな人」と捉える北欧を象徴しているのが、愛らしく良質な木のおもちゃです。デンマークのカイ・ボイスンやリサ・ラーソンら有名デザイナーが子どものために(大人のために)デザインしたすぐれた作品が多くあります。また、日本でも「イッタラバード」と呼ばれ人気のガラスの鳥シリーズは実に130羽以上を所蔵します。日用品や家具のデザインは、時代を映す鏡と言えます。特に石油系樹脂の実用化はさまざまな生活用品を大きく変えました。「日用品をおろそかにしてはいけません」という言葉に、コレクションのもうひとつの柱に日用品を選んだ織田氏の思いが伝わってきます。

暮らしを心地よくするための  
名品をトータルに。

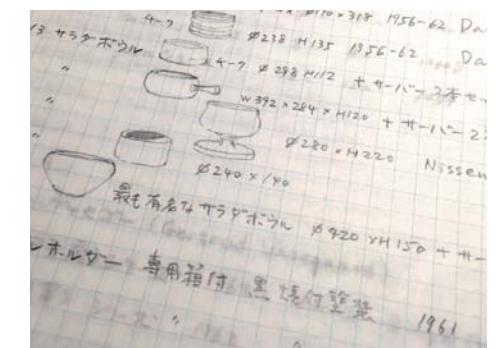


## 世界のデザイン史に残る、 「資料」という名の名作たち。

織田氏の椅子の研究は、大きく分けて6つの項目で展開されています。  
1)椅子に関する文献、展覧会の図録やポスター、カタログ、ビデオなどの情報収集、2)椅子1脚ごとの戸籍簿(データファイル)、3)名作椅子の収集、4)椅子の四方向写真によるフォトライブラリーの作成、5)椅子の原寸図面の作成と収集、6)椅子のファーストモデルからエンドモデルまでをデザイン年順にイラストレーション化、です。したがって現物の収集は6つの中のひとつであり、それを裏付ける資料が伴っているところが、研究資料としての価値をより一層高めているのです。

膨大な資料の一部を紹介しましょう。椅子の三面図約350脚分、600脚分

の四方向写真約2500カット、デザイン・製造年や工房がわかるデータファイル。これらは現在もつくり続けられています。また「本は知識の宝庫であり、時代の潮流を示す文化の象徴」と話す織田氏は、椅子が掲載された専門書や書籍、雑誌数万冊を自邸に蔵書として保管。インテリア専門誌「室内」全号、取材のノートと写真約5千カット、1800年代の建築雑誌やインテリア雑誌、1939年からの「ドムス」誌、カタログやポスターなどの印刷物は数えきれません。そして織田氏が連載を持つインテリア雑誌「モダンリビング」や「リプラン」、自身の著作も2017年3月時点で9冊、このあと自邸の写真集や東川の椅子の本など5冊が刊行予定です。





織田憲嗣邸

旭川空港そばに建つ織田氏の自邸。名作椅子や日用品が実際の生活の中で使われています。将来、空間の質を体験できる「ライブデザインミュージアム」として活用するのが織田氏の夢。



## 椅子研究家 織田憲嗣氏の、「神に導かれて」椅子にかけた人生。

半世紀近い椅子研究人生の中で、織田氏は何度か「もうやめなくては」と思ったことがあるそうです。毎日午前3時までイラストを描いて得た収入をすべて椅子につぎ込む生活。幼い娘さんを病院に連れて行こうとしたときにそのお金がなかったことは、今も辛い思い出です。しかしそのたびに家族をはじめ誰かが励ましたり手をさしのべてくれるので、やめられないままここまできたのだと。「きっと神様が、僕がやめるとほかにやる人がいないから手を貸したんだと思います(笑)」。

1980年に椅子研究室「CHAIR?」を設立し、趣味から研究にシフトして一気にふえた椅子は、その後旭川家具との縁により北海道旭川市へ移されます。2002年には隣町の東神楽町に椅子の一部を収蔵できる自邸を新築、椅子と日用品の2本柱で研究を継続してきました。Noritsugu Odaの名は世界の家具デザイン業界で知れ渡り、コレクションを譲り受けたいというオファーがいくつも届くまでになっています。個人の力では到底不可能なことを実現した織田氏。その情熱はどこから生まれるのでしょうか? 「コレクションの根底には、本来日本人が大切にしてきた価値観、『手間をかけてていねいに美しく暮らす』ことを思い出してほしいという願いがあります。ミュージアム建設は、いいものを長く使い続けましょうという、ファスト文化へのアンチテーゼでもあるのです」。

### ■受賞歴など

デンマーク家具賞 (1997年)

長年にわたり、デンマークの家具の価値を世界に知らしめた功績により受賞しました。自国外以外の受賞者は初めて。

デンマーク フィン・ユール協会名誉理事 (2012年)

日本人として初めて、同協会名誉理事の称号を授与されました。

「ODA CHAIR」発売 (2013年)

織田氏の著書「デンマークの椅子」がきっかけで、ナンナ・ディッツェルデザイン(1953年)のイージーチェアが復刻。「ODA CHAIR」と名付けられました。

第1回ハンス・J・ウェグナー賞 (2015年)

デンマーク家具デザインの巨匠ハンス・J・ウェグナーの生誕100年を記念して、氏の生誕地であるトナー市と同市立美術館が2015年に創設した賞。織田氏は「ウェグナーに関する研究成果を世界に対して発表し続け、ウェグナーの今日的な評価の向上に大きく寄与した」ことにより、審査員全員一致で選ばれました。

### ■主な著書

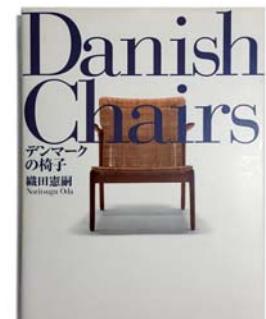
「日本の家」(福音館書店)、「ハンス・ウェグナーの椅子100」(平凡社)

「デンマークの椅子」(グリーンアロー出版社ほか)

「美しい椅子1~5」(共著・柏出版)、「イラストレーテッド名作椅子大全」(新潮社)

「フィン・ユールの世界」(平凡社)、「Finn Juhl」(韓国)、「HANS J. WEGNER」(台湾)

「スワルパワーをカタチにした! 200脚の椅子」(グリーンアロー出版社)など



織田憲嗣 椅子研究家・東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター

1946年高知県生まれ。大阪芸術大学卒業後、高島屋宣伝部にイラストレーター、グラフィックデザイナーとして勤務。その後独立しデザイン事務所を設立。1994年から北海道東海大学芸術工学部(当時)教授となり、特任教授を経て2015年まで務めたのち現職に。現在北海道東神楽町の森の中の自邸で暮らす。



## 織田コレクションのあゆみ

- 1972年 織田憲嗣氏が1脚目の名作椅子、ル・コルビュジエのLC4を購入
- 1980年 私設椅子研究室「CHAIR?」を設立
- 1989年 デンマーク180脚の椅子展(名古屋)
- 1990年 「第1回国際家具デザインフェア旭川1990」に関連する展示を織田氏の協力により開催  
「 фин・ユール追悼展」(大阪、京都、名古屋、東京、旭川)
- 1991年 有志により「織田コレクション協力会」発足
- 1994年 コレクションとともに織田氏が北海道旭川市へ移住
- 1995年 「巨匠ハンス・J・ウェグナー展」(東京)
- 1997年 「デンマークの椅子」出版記念「デンマークの椅子200脚展」(大阪)  
デンマーク家具賞受賞
- 2000年 「20世紀の名作椅子200人の200脚展」(神戸)
- 2002年 北海道東神楽町に織田氏が自ら平面図を描いた自邸が完成
- 2007年 「ノルディックモダニズム・デザイン&クラフト展」(長崎、宇都宮、京都、東京)
- 2010年 「木のプロダクト展」「スツールづくり展」(旭川)  
「北欧・フィンランドの生活デザインと文化展」(長野)
- 2011年 「北欧の美しい暮らし・ライフ&デザイン展」(旭川)
- 2012年 「 фин・ユール展」(ソウル)  
デンマーク フィン・ユール協会名誉理事の称号授与
- 2014年 「国際家具デザインフェア旭川2014」にて  
「生誕100年 ハンス・J・ウェグナー展」
- 2015年 第1回ハンス・J・ウェグナー賞受賞
- 2017年 東川町によるコレクションの公有化が決定、調印式  
デザインミュージアム設立準備室開設

### 〈織田コレクション概要〉

- 椅子 約1350種類(うちスカンジナビア諸国が約800種類)
- テーブル・デスク 約70種類
- キャビネット 約50種類
- 照明器具 約100種類
- 陶磁器 約3500ピース
- ガラス器 約1000ピース
- 器、ポウル類 約50種類
- カトラリー類 約1300ピース
- キャンドルホルダー 約50種類
- 木製玩具、オーナメント類、イッタラバードなど 約500種類
- バードハウス、バードフィーダー類 約100種類
- 名作椅子三面図 約300枚
- 建築家宮脇檀氏全住宅模型(遺品)
- 雑誌「室内」「モダンリビング」「リプラン」ほか、取材ノートと写真、原稿など  
全約8000点(資料含まず)

## ごあいさつ

大阪で百貨店の宣伝部に勤務したあと、フリーランスのグラフィックデザイナー、イラストレーターとして昼夜の区別もなく働いた25年間。その後、縁があつて旭川家具のカンディハウス創業者長原實さんに誘われ、23年前北海道に移住いたしました。北海道東海大学(現東海大学)芸術工学部デザイン学科にて教鞭を執らせていただく幸運に恵まれ、現在に至っております。

膨大な研究資料を関西から旭川へ運ぶため、長原さんがリーダーとなって旭川家具工業協同組合の人たちとともに立ち上げられたのが、「織田コレクション協力会」でした。旭川は日本でも指折りの家具産地であり、この地に家具を中心としたデザインミュージアムを設立することは必然であり、合理的であると考えます。以来デザインミュージアム設立は長原實さんと私の夢でした。

これまでの人生のほぼすべて、約半世紀を費やしてきたモダンデザインの研究とその資料収集は、これからの若い世代の人たちに「本当に美しいものとは、を問いかけ、実感してもらうために必ずや役立つと信じております。デザインミュージアム構想についてはこれまでにドイツやデンマークをはじめ、近隣諸国、そして国内の大企業からも数々のありがたいオファーをいただきました。しかし、これまでの四半世紀の長い間私を支えてくださった旭川家具の関係者や、織田コレクション協力会の方たちの思いを考えたとき、どうしても北海道以外に実現する選択肢はありませんでした。

そして約半世紀を経た2017年春、北海道旭川市の隣町、東川町が私のコレクションの公有化を決めてくださいました。20代から夢見てきたひとつのこと「デザインミュージアムの設立」が、今、少し動き始めました。これもひとえに織田コレクション協力会の会員企業様と個人会員様のお陰です。

心より感謝申し上げます。

日本はデザイン分野において、世界的なデザイナーやすぐれたデザイン製品を数多く生み出している先進国と言えるでしょう。しかし世界の先進国の中で唯一、デザインミュージアムを持っていない国もあるのです。日本各地には公立、私立を含め数百もの美術館がありますが、残念ながら他国のデザインミュージアムと肩を並べるような施設はひとつもありません。

国内には日本民藝館、国立民族学博物館、東洋陶磁美術館、そして一部

の企業によるグラフィックデザインを収集する美術館はありますが、そうした施設を除けばほとんどが絵画や彫刻、現代美術などアート系ばかりです。私たちの暮らしの中で使われてきた日用品は、世界的に著名なデザイナーによるものが数多くあります。特に20世紀中頃に生まれた製品にはデザイン史に残る名品が多いのです。

現在日本の生活文化を考えたとき、衣・食・住のすべてにおいてファストな価格訴求のものがそれぞれの市場を独占し、その売り上げは驚くべき数字です。しかしそうしたファストな製品の背景にはさまざまな問題が隠されています。その問題点に思いを馳せることなく、単に価格の安さにのみ惹かれて購入していくのでしょうか?資源やエネルギーを使って生まれたものには寿命があります。その寿命が短ければ短いほど、地球環境に負荷をかけるのです。ものには素材の寿命、構造(強度)の寿命、機能の寿命、そしてデザインの寿命があります。さらに、それらを生み出した人たちと使う人たちの熱意や愛着も寿命に含まれるでしょう。すぐれたデザイン作品には力があり、本物と呼ばれるものにはそれを手に入れたとき、心を揺さぶられる感動があります。ファストな製品やイミテーションには絶対にないものです。私が研究のために収集してきた家具や日用品は、そのほとんどが半世紀以上前に生まれたものです。欧米の先進国ではデザインの芸術性を認め、こうした製品をデザインミュージアムがパーマネントコレクション(永久展示品)として選定、購入しています。また、メーカーや著名なデザイナーは自ら進んでデザインミュージアムに作品を寄贈するのです。そんな優れた、本物と呼べるデザイン作品が常に見られるのがデザインミュージアムです。時代を生き抜いてきた本物だけが持つ力を有したデザイン作品が、やがて生活文化を高め民度を高めてゆくものと信じています。

「日本に初の本格的なデザインミュージアムの設立を」。小さな自治体ではありますが、身の丈に合った、しかし内容では欧米のデザインミュージアムに比肩できるようなものを創設したいのです。それは、ひとりでも多くの方が私たちの目標に賛同し、お力添えいただけることでしか叶わないでしょう。デザインミュージアム創設という夢をぜひ共有していただけますようお願い申し上げます。

東海大学名誉教授

東川町文化芸術コーディネーター

織田憲嗣